

学位論文要旨

学位論文題目 林京子初期文学研究

申請者氏名 鹿 安冉

林京子は 1930 年長崎県長崎市出身、翌年上海に移住し、1945 年帰国し被爆した。林京子文学といえば、8 月 9 日の被爆体験を語った『祭りの場』が代表作とされる。しかし、『祭りの場』につづいて執筆した「ギヤマン ビードロ」(1977 年 5 月)は被爆体験そのものではなく、原爆が三十年後の被爆者に及ぼす影響をテーマに据えている。またそれ以降、上海での少女時代や家庭における問題などを題材とした作品が展開していく。

70 年代、80 年代の作家本人の被爆体験だけに注目する一方で、作品の文学性の評価は低かった。90 年代に入っても、「ルポルターージュ的表現」(「事実として」、「作為を排して」、「虚飾を否定」した表現)という点では 70 年代、80 年代の観点と変わらない一方、林京子文学を高く評価する動きがはっきりと現れてくる。2000 年代には作品の「語り」に対する注目が高まり、その機能に関する研究者の関心や理解も深化していく。

本研究における筆者の関心は作家の人間観と創作行為の関係、とりわけ作家の創作意図と創作方法に注目し、それらの特質と相互関係を明らかにする点にある。まず、創作方法から見れば、次のような点が問題になろう。登場人物はどのように造形されているのか、すなわち、各々の人物がどのように配置され、関係させられることで、場面やストーリーが構成されるのか。またそこでは語り手の語りがどのように機能しているのか。次に、作家と作品の関係を見れば、林京子の人間観はそこでどのように機能しており、創作行為はその人間観とどのようなつながりを持っているのか。それら全体の結果として、林京子の作品は読者にとってどのような意味を持つのかも明らかにしたい。

本論においては、1977 年から 1987 年までの十年間に発表された林京子初期作品の中から四作品を選び、各々の人物造形や作品構成を分析するとともに、特に語りの機能に目を向けることで、初期林京子文学の特質を明らかにしたい。ここで取り上げる四作品は次のとおりである。「ギヤマン ビードロ」(1977 年 5 月)、「黄砂」(1977 年 7 月)、「老太婆の路地」(1979 年 1 月)、「雛人形」(1987 年 10 月)。なぜこれら四作品をここに取り上げたのかと言えば、それらが、登場人物の造形方法や、作品世界の枠組みとしての人物の時間空間配置、また語り手「私」による語りの方等において、各々独自な特質をもつと考えるからである。本論においては、それらの多様な創作方法を検討することで、初期林京子文学の特質を明らかにしようと試みる。

「老太婆の路地」は人間を空間的位置の中で描き、「雛人形」は時間の中で人間を捉え、表現するのに対し、「黄砂」におけるお清さんの人物造形は時空を超えて象徴的であるといえる。また、「雛人形」の「私」が社会的広がりの中で自己発見になるのに対し、「ギヤマン ビードロ」の「私」は個人的な体験の重なりの中で自己発見に至る。いずれの作品でも、語り手は結末を見越して語るのではなく、語る過程を通して、作品世界と結末を発見していく。この四作品から見れば、語り手の「ありのまま」を語る中で、登場人物の無意識的領域が立ち現れ、そのことによって、語る以前に認識していなかった自分自身と世界を新たに発見することになると言える。以上のような意味で、「ギヤマン ビードロ」(1977 年)から「雛人形」(1987 年)まで、語り手「私」の自己発見、人間の本質を根源的に探ろう

という基本的なテーマは共通している一方で、空間表現を主とする作品と時間表現に重点を置く作品、個人的体験の重視と社会的人間関係への注目等、非常に多様なバリエーションを見て取れることができるであろう。「ギヤマン ビードロ」では被爆者の魂の傷のシンボリックな表現を通して、実存的存在としての人間に迫る。「黄砂」では、人間の生と死の諸相を通して生命を象徴的に表現し、生命的存在としての人間に迫る。「老太婆の路地」では、日本人と中国人の民族意識、国家意識の対立や交錯を通して、歴史的社会的存在としての人間に迫る。「雛人形」では、時間における女性の愛の展開を通して、穢れと祓いのなかに生きる女性にとっての被爆体験の闇に迫る。つまり、これら四作は、原爆を受けた人間の悲惨さをダイレクトに描写していないにも関わらず、原爆を通して、人間の諸相を描き、それぞれの形で人間のありようを根源的に探ろうとしている。

林京子という作家は認識の結果を表現する（考え、理解したことを書く）のではなく、創作過程が認識に先行するからこそ、その作品世界創造が可能になる考えられている。このように作品創作による世界の発見と創造のダイナミズムが、林京子という作家の大きな価値であろう。本論で取り上げたのはわずか四作品だが、その中でも、被爆作家としての枠組みの中に限定されない、日本近現代文学史における作家的意義は示し得たと考える。今後は、林京子の他の諸作品と、他の原爆作家たちとの比較に進み出ることにより、林京子の作家的意義をより広い範囲において明らかにしていきたいと思う。

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲 第 号	氏 名	鹿 安 冉
論文題目	林京子初期文学研究		

(論文審査概要)

(学位論文の内容)

序章では、戦前の上海で幼少期を過ごし、帰国後長崎で被爆した体験を持つ林京子は、核の問題と自身の生き方とを結び付けて作品化した注目すべき作家であり、したがってその作品を分析することで、作家の創作意図が創作行為といかに関係しあっているかを考察しようとの問題関心を述べている。

第1章「林京子作品研究史論」では、林京子作品に関する研究史をとりあげる。かつての研究では被爆体験には注目しつつも文学性における評価は低かったが、2000年代になると創作方法についての分析を通してあらためて見直されている。この動向を受け、作者の実体験への還元としてではなく、語りを通して構築されたものとして作品世界を見ることができるとの視座を提示する。

第2章「林京子『ギヤマン ビードロ論』—『傷もの』ものとしての人間—」では、友人との長崎旅行に赴いた「私」が、古美術店で見た長崎ガラスの傷の意味を原爆館コーナーで溶けたガラスを見ることで認識する様子を描き、それを通して無意識の領域に抑圧されていた被爆の傷を語りによって自覚する過程を見てとっている。

第3章「林京子『黄砂』論—お清さんの造形をめぐる—」では、上海を舞台に、幼い「私」の視点によって、日本人娼婦お清さんとの交流を通して、原爆で死んだ人たちと生き残った自分自身との時空を超えたあり方に思いを馳せたものとする。

第4章「林京子『老太婆の路地』—語りの二重性をめぐる—」では、上海事変下の上海の路地裏での半日に、幼い「私」が直面した国家意識・民族意識、国家権力の暴力性といった問題を描く。幼い「私」のまなざしを通して、国や民族を超えた普遍的な倫理への思考が表現されているとする。

第5章「林京子『雛人形』論—作品の時間構造をめぐる—」は、孫へ送る雛人形と夫の保険金という二つのストーリーを並行させつつ、30年間という長い時間のなかでの「私」の無意識の領域を浮かび上がらせたものとする。

終章では以上を総括し、語り手が過去の自分を語ることによって、自身も知らなかった無意識の領域に踏み込み、自分自身を発見するという林京子作品の創作姿勢、方法を読み取ることができるとする。

1. 創造性

林京子文学をめぐる、70年代以降の動向を丁寧につりかえつつ、単に被爆作品として見るのではなく、文学作品として評価しようとする動向にあることを指摘している。そうした研究動向に位置づけながら、近年の文学研究における「語り論」の方法をもふまえることで新たな評価を加え、林京子研究の水準を引き上げるものとなっている。したがって創造性の面では達成できていると評価できる。

2. 論理性

申請者の方法的主張は、語り手・登場人物・作者自身をそれぞれ弁別したうえでテキストを理解するというものである。そのことの有効性を、三者が一致する自伝的一人称小説を分析対象としてとりあげることによって示している。また上海時代・被爆体験・現在の家庭と舞台をそれぞれ異にし、したがって登場人物である「私」も相互に異なる年代の作品を取り上げることによっても、その有効性を確認しようとする工夫がなされている。このように、仮説を一貫性のある展開から検証したものといえ、論理性は達成できていると評価できる。

3. 厳格性

70年代以降の林京子研究を網羅的に検討し、かつ文学研究の方法を取り入れつつ分析視角を提示している。直接とりあげた4つの作品それぞれについても、十分な読解と内在的な分析を通して仮説の検証を行っている。したがって厳格性は達成できていると評価できる。

4. 発展性

小森陽一、ミハイル・バフチンなどの文学理論に積極的に学び、その方法を自身の分析に応用しようと努めている。文学理論の吸収には未熟な部分が残るとはいえ、分析枠組みを近年の文学理論から積極的に吸収しようとする姿勢は評価できる。その意味で、発展性においては達成できている。

論文審査結果

⊕・否

審査委員 主査 (氏名) 森 下 敏

(氏名) 森野 正弘

(氏名) 有元 光彦

(氏名) 熊井 将太

(氏名) _____ ⊕